協賛機関挨拶

財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会 医療経済研究機構　専務理事
岡部　陽二

第17回ファイザーヘルスリサーチフォーラムの協賛研究機関を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

先ほど島谷理事長からお話がありましたように、第19回となる今年の研究助成は、採択件数41件で約6,000万円とうかがっておりますが、この助成額は前年より1,600万円も増やしていただきました。大変大きな額です。

今年のフォーラムの基本テーマは「社会と共進化するヘルスリサーチ」と設定されておりますが、先ほどのポスターセッションをおうかがいし、これからの演題を拝見しても、医療を、経済効果の観点や、法律、IT技術との関連、地域社会との関わり合いといった観点から取り上げて、鋭く分析された、幅広いテーマの研究実績が増えてきたように実感しております。

ところで、皆さん方もご存じの通り、ファイザー社は厳しい経営環境にありながらも、リストラを進める一方で、新しい研究分野への挑戦や積極的なM&A活動で経済危機を乗り越えられ、引き続き高い収益率を維持しておられます。ファイザー社にとって今年最大のニュースは6月にワイス社との統合が実現したことです。統合後の新生ファイザー社は広範囲の製品群を擁して、強固な製品パイプラインを増やされました。この統合により、多様化した疾病領域において、ワクチンやバイオ製剤をはじめとする多くの優れた製品を提供され、名実共に世界のトップ企業の座を確固たるものにされたと承知しております。

日本法人も昨年設立55周年を迎えられ、これを機会に岩崎前社長が名誉会長にお就きになって、梅田一郎新社長の下で社員数5,850人、その内MRに何と3,040人を擁して、年間売上高はおそらく5,000億円か6,000億円を超える国内最大規模の一角を目指しておられるところです。そのお陰をもち、またファイザーヘルスリサーチ振興財団のご尽力によって、研究助成やヘルスリサーチワークショップを引き続き行っていただけますのは、研究者にとって大変有り難いことです。この分野におけるファイザー社の積極的な研究助成活動に心から敬意を表して、関係者の一人として厚く御礼申し上げます。

ヘルスリサーチの定義について、他の医学、医療関連分野との関係をどう考えるべきか、研究者にとって大変難しい課題でしたが、さいわい3年ほど前から選考委員長を務めていただいている永井良三先生に整理していただき、大変わかりやすくなったと思っております。

要するに、医学・薬学・医療政策の研究を、基礎から臨床へという単純な図式で捉えるのではなく、もっとダイナミックな流れの中で他の分野との関わりあいを考えなければいけない。生物・医学的な技術面の研究ではなく、人であるとか、社会であるとか、あるい

は医療保健システムといったものを対象とする研究である。そのように理解しております。さらに絞れば、国民が最適な医療を受けることのできるシステムに関する研究と理解しても良いようです。

助成案件の評価についても、現代の要請にマッチした研究、独創性のある研究、将来性のある萌芽的研究といった明確な基準が示され、これまで以上に国際共同研究を優先する方針も明示されているところです。

ところで、医療経済研究機構と医療経済学会の共同編集で発行している『医療経済研究誌』という学術誌がありますが、これも近年内容が充実してまいり、昨年、初めて全ページ英語の論文誌を１冊発行し、今年も引き続き発行する計画です。

ファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成におきましても、高い研究の質を担保するという観点から、研究助成の条件として「研究成果は学術誌、学会誌等の専門誌に投稿すること」と明示されております。つきましては、ファイザーヘルスリサーチ振興財団で採択された研究プロジェクトの成果発表の場の一つとして、『医療経済研究誌』を活用されるようお薦めし、積極的な投稿をお待ちしております。

ファイザージャパンは梅田新社長の下、より健康な世界の実現のために日本で最も信頼され最も価値あるヘルスケア企業を目指して、「真に実効性のある社会貢献プログラムは何か」といった問題意識をもって、グローバルなリソースを活用して、日本の医療に貢献する事業活動を展開しておられます。その中でも、冒頭に申し上げたように、ヘルスリサーチ研究への助成が大きな目玉です。研究体制が立ち遅れているこの分野での研究振興に着目されたファイザーヘルスリサーチ振興財団の先見性に改めて敬意を表し、このフォーラムが益々充実した、存在感のある研究交流の場として力強く発展されることを期待して、私の挨拶とさせていただきます。